

転生特典：日記帳

迷ネーズ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中世西洋基準だと、紙つて結構な高級品なんです。

目次

後編 前編

| | |
|--|--|
| | |
|--|--|

19 1

前編

著者：ヨハン

○月○日

奴隸の少女を拾った。

○月○日

少女は、かなりひどい扱いを受けていたようだ。

野菜の切れ端しか入っていない薄味のスープを美味そうに飲んでいる。

○月○日

奴隸を拾わなかったかと、城の兵が聞き込みをしていた。

○月○日

奴隸の少女を城に届け出ようと思ったのだが、外に連れ出そうとすると嫌がるそぶりを見せる。

しまいには、暴れて噛み付くので、干し肉の切れ端を与えて宥める。

そんなに元の主人のところに帰るのが嫌なのだろうか。

○月○日

幼い子どもが家にいるので抜けない。

○月○日

今日も野菜の切れ端に薄く塩で味付けしただけのスープと、岩みたいに固いパンだけの晩飯を出してやる。

本当に美味そうに少女はスープを飲んでいる。

○月○日

晩飯の途中、少女の方からガリツと音がした。

少女が目を白黒させている。どうやら乳歯が欠けたようだ。

口をすずがせて、口の中を見る。

血は出てない。感染症の恐れは少ないだろう。

パンはスープに浸して、なるたけ柔らかくしてから食うと良いと教えてやった。

○月○日

晩飯中、ずっとニコニコしている。

どうした、と聞くと、「パンも美味しい」と答えた。

もつと早くにスープに浸すことを教えてやれば良かった。

○月○日

抜きたいし、肉も食いたい。

○月○日

相変わらず、兵が聞き込みをしている。

○月○日

少女に、どうして帰りたくないんだ、と聞いた。

話したくないし、帰りたくない、と返された。

拾った時、全身傷だらけだったことを考えると、已む無しではある。

○月○日

家に帰ると、晩飯の用意ができていた。

といっても、相変わらずの薄味スープに岩パン。

だが、自分で作るより、誰かに作ってもらうほうが美味しく感じるから不思議である。

褒めると、少女は得意な様子だった。

○月○日

昨日と同じように、少女が飯の用意をしてくれていた。

気のせいではない。明らかに俺が作るより美味しい。

まさか、少女にこんな才能があったとは。

○月○日

塩壺が空になっていた。美味しいわけだ。

塩の量を倍にしただけの話だったようだ。

はて、いかがしたものか。

○月○日

俺が留守の間は、火を使うな、と念押しした。

誰も家に居ないはずなのに、煙が出ているのを不審に思われたら、城に連れて帰られるかもしれないぞ、と脅す。

おびえて首を縦に振る少女。

美味しいスープはしばらくお預けだろう。

○月○日

最近、世の中の動きがきな臭い。

領主様のところで、よくないことが立て続けに起きているそうだ。あと、隣の領地の御偉いさんとの関係も良くないと聞く。

もしかしたら、近々戦争になるかもしれない。

そんなことより抜きたい、肉食いたい。

○月○日

相変わらず、兵が奴隷探しで外をうろついている。

むしろ、数が増えている気がする。

火を使うなど、釘を刺しておいて良かったのかもしれない。

○月○日

家から家に兵士が聞き込みを繰り返しているらしい。

「隠すためにならんぞ、つてこう眼尻を釣り上げてな」

怖い顔で凄まれたと、知り合いのハンスが肩を抱いて震えてみせた。

「大体、一人でどこかで野垂れ死んでいるだろうに」

呆れた様子で笑うハンスに、そうだな、気のない返事を返す。

「最近、ずっと元気がないな？ 抜きすぎか？」

そうだな、と誤魔化す。

実際は、薄味のスープと岩パン続きで肉を食っていないから、精力が湧かないのだ。

だというのに、仕事の効率は前々と変わらない。

不思議なものだ。

○月○日

隣の領主様と、戦争になるかもしれない。

○月○日

今日、兵士が家にやってきて、徴兵に備えるように告げていった。

「備えると言っても、独身の農奴に準備することなどほぼあるまい。さっさと家と道具

を売り払って登城するように」

まあ、本来はそのとおりなのだが。

はて、藁積みの中に隠れて震えている少女をどうしたものだろうか？

○月○日

号泣する少女にここを出ていくよう告げた。

最初は、この家を少女にくれてやっても良い。そう考えた。

戦争に家と引き換えの金子を持っていく意味はないからだ。

戦に勝てばどのみち報奨金も出る。

でも、家を売るということには、整理の意味合いより、管理の意味合いの方が大きい。

無人となった家は、誰かに所有され管理されなければ、ならず者のたまり場となり得る。

幼い少女が一人で隠れ住むには、この小屋は危険過ぎる。

多分、元のご主人様のところに戻ったほうが安全だと。

ちやんと、食っていけると。

懇切丁寧に説明する。

最後まで、少女は首を縦には振らなかった。

○月○日

これ以上悪くなることはあるまいと、ハンスに相談した。

「とんだ厄ネタじゃねえか！」

ハンスは天を仰いで、両手で顔を覆った。

「アホか！ この話はなかったことにしてくれ！」

吊られるなら一人で吊られてこい！」

ああ、うちの領主様ならやりかねん、と首肯する。

だが、俺とコイツは二年來の友人だ。

コイツが本気でそう言っていないことはわかっている。

「……………」

真剣な表情を作ると、ハンスは俺の目をじつと見てきた。

「どうして、お前はその娘をそんなに助けたいんだよ」

どうしてって言われても……。

ガキがのたれ死にそうになっているのを見捨てたら、そいつはもう人間じゃないって、じいさんに育てられたからだ。

俺だって、元は爺さんに拾われた『のたれ死にかけていたガキ』の一人である。

これって当たり前のことじゃないか？

「はっはっは。何度聞いてもお前の爺さんはすごいな。」

思考が完全に現代日本人のそれじゃないか」

ハンスは、俺が爺さんの話をする、いつも手を叩いて笑う。何がそんなに愉快なのか、俺にはいまいちわからない。

○月○日

今日、ハンスに会った。

ハンスは学校に通ったことがあるのだろうか。

爺さんもだいぶん博学だと思っていたが、ハンスは困った時に相談すれば、大概のことに答えをくれる。

○月○日

家の入口に立った兵士に、徴兵に応じることができないことを告げた。

牛に踏みつけられて、潰された右腕を見せたら、納得して帰って行った。

○月○日

薄々感づいていたが、ハンスの正体は多分悪魔だ。

右腕を潰すことを代償に要求してきたあたりで、九分九厘そうだと思っていたが、こんな奇跡を起こしたとあれば、もう間違いない。

領主様があれだけ血眼になって探している奴隷の少女を連れた上で、関所を通ることに成功したのだ！

農奴は領地の外に出る際には、関所で高い金を払い、しつかりと身元を明かさなければならぬ。

とは言うものの、農奴生活で金が必要になる場面なんて限られている。基本、俺たちの生活は物々交換だ。

ハンスは、家を買った金だけで十分だ、と言った。

ただ、金を出す際、潰した右腕を黙って見せなければいい、とも言っていた。

少女のことは、ただ、妹と誤魔化せばいい、と。

「魔法のタネはもう仕込みが終わっている。

街でも、元気だな。我が親愛なるヨハン」

悪魔に友人扱いされるのもゾツとしない話だが……右腕一つで願いを叶えてもらえるのならば、悪い話でもないのかもしれない。

著者：ハンス

○月○日

我、高二にして中世ヨーロッパっぽい異世界に降り立つ。

○月○日

俺の知識量で、既に『賢者』扱いだからな。

中世ってちよろい。

○月○日

魔女狩りに遭いかけた。やうあかった。

○月○日

出る杭は打たれる。よーわかった。

つまりは、おばあちゃんの知恵袋レベルに抑えろってことだな？

○月○日

【この時代】おばあちゃんが魔女だったことが判明（レベル低すぎ）

○月○日

俺、もう一生この領地の外には出んわ

下手に文明に触れると、マウント取りたくなるもん

一人の農奴として、大地とともに生きていくことにする。

○月○日

農奴生活を送ってて、女の子との出会いがないわけでもないが、いかんせん、俺の頭の中に詰まっているのは現代日本の価値観である。

平成から令和にかけて仕込んできた必殺のジョークの数々が通じねえ……。

○月○日

【君の名は?】俺氏、笑いのツボが同じ相手に出会う【だが男だ】

○月○日

もしかしてと思い、転生者かどうかヨハンに確かめてみる。

日本、という国を知っているかと聞いたが、そもそも『国』の概念すら理解が不明瞭だった。中世の教育レベルあるあるだ。

博識だった爺さんなら何か知っていたかもしれない、と言っていたが、その爺さんは5年前にくたばっているらしい。

博識な爺さん、ねえ……?

爺さんにはいろいろと大事なことを教わったが、果たして関所を通る方法だけは教わらず終いだつたと、領地の外に出る門の方を指差していた。

○月○日

この時代の農奴が日記かけるレベルで文字が書けるものかよ。

ヨハンの爺さんも、絶対転生者だわ。

○月○日

ヨハンのやつはモテるが、あまりガツつくところを見たことがない。

○月○日

また、女の子を一人袖にしていた。

アイツ、性欲つてものがないのか？

○月○日

ヨハン、一人ぐらい俺に紹介してくんねーかな。

○月○日

ヨハンの野郎、モテるチートでも持っているのか？

○月○日

モテるチートの正体は、どうしようもなくくだらないものだった。

なるほど、賢者モードだったら、ガツクこともないな。なるほど。

おそらくだが、ガツツカないのがクールに見えているのだろう。

こいつの爺さんの教えらしい。

「ドキツとしても、一回踏みとどまれ。

抜いて、まだドキツとするようなら本当に好きなんじゃよ……」

いや、その教え本当に正しいのか？

なんか、いろいろと邪魔にしかなくなってなくね？

○月○日

【亀の甲より】俺氏、異世界にて初彼女をゲット【年の功】

○月○日

本番で出す分を残していなかったせいで、すぐに別れた。

次こそは、上手くやる。

○月○日

奴隷が一人、城から抜けたってんで、兵隊が聞き取りをしていた。

○月○日

最近、ヨハンのやつはよく笑う。

どこか頬がコケた感じの元気の無さがデフォルトのはずなんだが……健康的に頬に赤みが差しているんだよな。

○月○日

ヨハンの野郎、話しかけるとどこか上の空だが、肉体にはエネルギーが張り詰めているような、そんな感じがする。

コイツ、抜いているとか言っているが嘘だな。

だいぶ長く禁欲を続けているようだが、何か目的があるのだろうか。

○月○日

はい、アウト。ないない、それはない。

ヨハンのやつ、逃げた奴隷を匿つてたのかよ……。そりゃ抜けないわな。

ヨハンが持ち込んだ厄介事に、思わず頭を抱える。

タレコミを考えなかつたわけじゃないが……。目の前にいるのは、親友のヨハンだ。

自重していたつもりでも、他の農奴の悩みを知識無双で解決していたら、そこそこ不気味がられて、他のやつらからは距離を置かれるようになった。

そんな俺と、最後までツルンでいたのがコイツだ。

なるべく助けてやりたい……。俺は心からそう思った。

考える時間をくれ、と言つてヨハンを追い返す。

○月○日

やつの相談で、満たすべき要件は、2つ。

『奴隷の少女を安全なところへ逃がすこと』

『奴隷の少女が食いつばぐれないこと』

でも、奴隷の少女が一人で生きていけるほどこの時代は優しくない。

必ず、ヨハンがそばに付いていてやる必要がある。

でも、ヨハンは徴兵される寸前だから……？

ヨハンと少女がともに領地の外に出ればいい。これが正解か。

でもこの領地、農奴の囲い込みしてるからな……入るのは簡単でも、出るのが難しいんだよな……徴兵受けている青年とお尋ね者の少女……逃げ出そうとするとところを見つかれば命はないよな。

そう考えているうちに、『右手を潰して、農奴としても兵士としても使い物にならないとヨハンが判断されれば二束三文で関所素通りでしょ』という電波を受信する。

はーい、ポツで。少女のほうが関所抜けらんないじゃん。

○月○日

また兵隊がやってきて、奴隷を見なかったか確認してきた。

知らない、と嘘をつく。

「傷だらけで、小汚い少女を見かけたら、すぐに知らせるように」

それだけ言って、兵は帰っていった。

傷だらけね……傷だらけ？ あいつ、今傷だらけって言ったか？

○月○日

ヨハンの家を訪ねて、自分の推測が正しかったことを確かめた。

迷わず、電波を垂れ流してきた。

ヨハンのやつは、一瞬何か恐ろしいものを見るような目で俺を見てきたが、ほどなく

して俺の手をとって礼を言ってきた。

○月○日

たつての頼みとは言え、友人の肉と骨をミンチにするつてのは、嫌な仕事だ。生まれ変わったとして、二度とやりたくない。

これで俺も実行犯なわけだ。

○月○日

今頃、ヨハンのやつは、あの美しい少女とともに、閨門を抜けているだろうか？

多分、大丈夫だろう。あの少女が、虐げられていた奴隷だと気がつくのは、かなり無理がある。

ヨハンの庇護のもとで数ヶ月傷を癒やし、しっかりと食わせてもらっていた少女は、奴隷とは思えないほどに健康的な見た目に化けていた。

ぐずる奴隷の少女に、自分の楽しみのみ干し肉を食わせ続ける農奴ヨハンとかこの世に居るんやな……。

ヨハンの努力は、数ヶ月かけて、魔法と遜色ないレベルで、少女の正体を隠している。意図したものではないかもしれないが、仕込みは上々。そう、ヨハンのやつには太鼓判を押してやった。

それにしても、本当にこの時代の教育水準がお粗末だよな。先入観で物事を語るやつ

が多すぎる。

「奴隷は小汚いもの」とか「傷だらけの姿で逃げ出したから、傷だらけの相手を探せばいい」とか。そんな伝令を出す領主様もアホだし、それを鵜呑みにする末端も末端だ。もしかしたら、奴隷に手を差し伸べる物好きなんて居ない、とも考えているかもしれない。

もしそうだったら、今回の件は、「日本人の倫理観の勝利だ」とも言えなくない。……ちやんと勝っているよな？

今の俺に、やつらがちやんと逃げられたのか、確認する時間はない。

ま、九分九厘成功だろう。右手の使えない農奴が勝手に出ていくのに、そもそも止めるやつなんざいないし、幼い少女も働き手になりえないから、出ていくつてんなら、それも止めるやつはいない。その上ちやんと金を出すというのだ。健全な労働力はいくら積んでも出て行けないが、領地の財を増やすのに役に立たない人間が出ていくのは咎めない。この関門はそういうふうにできている。身元確認のため、なんておためごかしているが……別に俺、この領地に入る時に戸籍をもらってないんだよな……戸籍管理しないのに身元確認とか意味ないじゃん。

ヨハンのやつは読み書きができる。左腕一本でも、街でなら仕事があるはずだ。むしろ、この時代の識字率の低さなら、どこでも引っぱりだこかもしれない。

唯一ジョークが通じるヨハンも居なくなつたし……農奴生活も悪くなかつたが、俺も領地を抜け出せないかね？

機を見て、今度の戦場から逃げ出せれば、俺にもワンチャンあるかもしれない。

生きていても、死んでいても、この家にはもう戻らないつもりだが……はて、どうなるかね？

もうそろそろ、登城しなくちゃいけないだろう。

今回はここらで筆を置くとしようか。

俺の、異世界での親友の幸福を願つて。

ハンス・タロウ・ヤマダ

後編

著者：ケビン

○月○日

闇市で掘り出し物だと勘違いして、本を買ったが、内容は農奴の日記帳だった。

俺の馬鹿野郎。

戦場から拾われてきた鎧の類が安く流れてきていたのに、何でこんなものを買っちゃったんだろう。

○月○日

そこそこいい値段したからな。活用しなくちや損てもんだらう。

○月○日

この日記帳の前の持ち主は、勉強のしすぎで頭がやられたんだらう。

『転生』だの『チート』だの意味のわからない単語や、妄想が書き連ねられている。

○月○日

警備兵つてのは暇な仕事だ。

基本、突っ立って、往來を眺めてりゃ1日が終わる。

読み書きができる俺には、日誌を付ける作業があるが、それも、『何もなかった』って書けば終わるしな。

○月○日

また今日も平和な一日だった。

○月○日

暇だな。嫁欲しい。

○月○日

最近、往來の量が増えている気がする。

何でも、隣の領地とそのまたお隣の領地の間で何かあったらしい。

その関係かね？

○月○日

右手がダメになっちゃった農奴と、その妹とかいう組み合わせを詰所に泊めている以外は、今日も特に変わったことはない。

その兄妹は身分証明も紹介状の類もなし。信用がないやつを街に入れるわけにはいかない。だが、どうやら兄の方が文字の読み書きができるらしかった。

詰所の日誌に「特になし」以外のことを書くのは何ヶ月ぶりだろう。

○月○日

上司のやつが件の兄妹、その兄の方に職を紹介してやったらしい。兄妹は午後には詰所を出ていった。

○月○日

やっぱ暇だ。

上司に、この間の兄妹の後見人として勝手に俺の名前を使われていたが、文句を言ったら酒代が出てきた。

まあ、後見人として泥をかぶることなんて滅多にないしな！

○月○日

ちよっぴり不安だったから、書簡に少しだけ目を通しておく。

ヨハンとアンナね。えっと、兄の方は『妹を守る』とかって理由で街に来たのか、ふん……。

『守る』って何だ？ 『養う』じゃなくて？

でも養うといつても、ガキでも自分の食い扶持くらい自分で稼げるよな？

よく意味はわからんが、上司の目を信じることにした。

○月○日

それにしても、最近の農奴は読み書きできるんだな。

この日記の持ち主も、ヨハンも、どこの教会に通ってたんだらうな。

○月○日

領主仕えの農奴がそろって教育を受けている？

よくよく考えてみたら、そんな馬鹿な話があるのか？

○月○日

読み書きなんざ、生きるために必要ないって思っているやつらもそこそこいる。

領主様仕えの農奴となると、何もかもを物々交換で済ませて、金勘定を敬遠するやつすらいるしな。

考えてみたら、この日記帳の元の持ち主は、相当変な奴だ。

○月○日

日記帳の中に、前の持ち主のサインを見つけた。

ハンス・タロー・ヤマダ……こいつ、何者なんだ？

○月○日

ヤマダ・タロー……聞き慣れない響きだが、もしかして、これ、魔法名ってやつじゃないか？

○月○日

血と泥で読めない部分は諦めて、もう一度ハンスの手記に目を通すことにした。

○月○日

青しそを絞った汁とビネガー酢か……週末の市で手に入るだろうか？

○月○日

すげー……ビネガーは卵の殻を溶かすのか……

○月○日

ビネガーで古い硬貨コインを磨くとピカピカになるなんて……！

流石にゾツとして、実験に使ったビネガーを瓶ごと部屋の窓から川に捨てると、戸と窓を全て閉めて実験道具を誰にも見られないように片付けた。

○月○日

手元に置いておくのも怖かったので、ピカピカの硬貨は使っちゃまった。

店の婆さんは新貨だと喜んでいたが、俺は冷や汗をかきっぱなしだった。

○月○日

俺はどうやら、あの日の闇市でとんだ掘り出し物を手に入れていたらしい。

間違いない……この日記帳の正体は、錬金術について書かれた魔導書だ。

○月○日

この本を捨てるべき、だろうか？

○月○日

仕事の間も、この日記のことが頭を離れない。

○月○日

久しぶりに、上司にどやされた。

この日記のことで頭がいっぱいで、仕事に身が入らない。

○月○日

誰か、この本に書かれている内容がわかる人間に見つかる前に、この本を処分するべきだ。

でも、この本を処分して、俺は無事なのだろうか。

いまさら、本の血のシミが恐ろしいものに思える。

○月○日

ハンス・タロー・ヤマダの身に一体何があったのだろうか。

血で汚れた部分から、断片的に読み取る事ができる。

「頭に声電波を受信してが降りてきて」とか「私が死んでもここには戻らない」とか「異界の親愛なる

友人に」とか、悪魔と、その契約の存在を仄めかす記述がある。

間違いない、ハンス・タロー・ヤマダ……彼は、悪魔にその身を引き裂かれたのだ。

○月○日

ハンス・タロー・ヤマダも、この本が恐ろしくなつて捨てようとしたに違いない。そして……。

嫌だ！ 嫌だ！ 俺は死にたくない！

○月○日

飯が喉を通らない。

○月○日

上司から、しばらく休めと言われた。どうやら、周りから見てもハッキリとわかるくらいに、まいっちまっているらしい。

○月○日

俺は地獄に落ちるのだろうか？

○月○日

そうだ、この街の神父様なら何とかしてくれるに違いない。

明日、目が醒めたら教会に行こう。

それで万事解決するはずだ。……そうであってくれ。

著者：オリバー・ジローサブロー・スタックウエイン

○月○日

日が暮れたんで、教会を閉じようと思っていた、人目を忍ぶように一人の衛兵がやって来た。

店じまい直前狙って、隠れるようにやってくるのか厄介事にしか思えなかったんで、本当は拒否りたかった。

評判のいい神父様で通っているんで、断るに断れなかったのだが。

結論から言えば、厄介事であり、同時にとても興味深い話でもあった。

街の衛兵が持ち込んだのは、転生した日本人の遺物だったのだ。

いたく感動した。俺以外の転生日本人なんて本当にいたのか。

遺物の正体は日記帳。ケビンはこちらを闇市で買ったものだと言った。

日記の内容をパラパラとめくっていたが、この本の元の持ち主は、スタートの切り方を間違えて魔女狩りに遭ったらしい。馬鹿だなコイツ。この時代だったら、教会スタート一択じゃね？

教会側に立って使えば、俺たちの現代知識は『奇跡』扱いされるが、そうじゃなきゃ、『怪しげな呪術』扱いされて迫害を受けるのは自明の理だ。

……で、評判の悪い領地にあえて潜り込むことで、魔女狩りの追手を巻き、農奴とし

……。

これで、俺は、地獄に堕ちずに、済むんですよね？」

「あなたが、悔い改めれば」

「……ああ、もう……生きたこ、ここちが、しなくてええ……よがっだあああああ……」

ケビンのヤツ、終いには大号泣である。

最後まで笑わなかった俺を、誰か褒めてくれ。

○月○日

ケビンから預かったこの日記帳、一体どうしたもんかね？

○月○日

酒の肴にすることにした。

○月○日

最後の方のケビンの迷走っぷりがヤバい。何これ草。

○月○日

シソの汁に酸性の液体を加えると、赤くなる実験か……。ガキの頃に俺もやったな。

いや、あれって紫キヤベツだっけ？

あー、確かに。初見だと血に見えなくもない……。のか？

まあ、それなら魔術実験と勘違いしても仕方ないか。一応。

ハンス・タロー・ヤマダは何を思つてシソを赤くそめる方法を日記に書き留めていたのだろう。

○月○日

週末のお説教、後方座席にケビンの姿を見かけた。

どうやら日記のことがかなり効いて、祈りを捧げに来るようになったっぽい。

信者ひとりげっーと。

○月○日

ケビンは、お酢に卵の殻が溶ける過程の、一体どの部分に恐怖を憶えたのだろう。

マジわからん。

○月○日

今週のお説教にもケビン来てた。

○月○日

硬貨かー……お酢で磨いてピカピカにすると、意味もなく嬉しくなるよな。

十円玉磨き、俺もやってたな。

俺もこの世界の貨幣で真似してみたいが……こればかりは、マジで捕まるかもわからん。

新しい硬貨と古い硬貨では、額面が同じでも価値に差が出てくることがある。

時代柄、貨幣鑄造技術が不完全だからな。古い硬貨は割れるかもしれないのだ。貨幣の新旧を偽るのは、かなり危ない橋に思える。

○月○日

へー……ハンス・タローの居た場所には、以前、転生者がいたかもしれないのか。ハンス・タローも俺と同じように他の転生者の気配を感じていたらしい。

もしかしたら、俺が思うよりもずっと、この世界には元日本人が混じっているのかもしれない。

○月○日

ハンタローのヤツ、彼女が居たことあったのか……妬ましい。

○月○日

週末の説教、ケビンのヤツが後部座席で信者の娘さんを口説いているのが見えた。

○月○日

何だろう、世の中の彼女が居るやつは全員爆ぜねーかな。

○月○日

神職は純潔でなければならぬから童貞なだけで、別にモテないわけじゃない。モテねえわけじゃねえんだよ、クソが……。

○月○日

ケビンのヤツと信者の娘さんの姿が、説教を聞きに来ている人の中に見えなかった。……まだだ、まだそうと決まったわけじゃない。

○月○日

つうか、祈りを捧げに来ないとか、ケビンのやつ地獄に落ちるのが怖くねーのかな？別に私怨ではない。断じて。

○月○日

今週のお説教にもケビンのやつの姿が見えない。

○月○日

ハンヤマダが童貞捨てるくだりがアツタマツたので、ハンスマダの日記帳を火に焚くべてやった。

これでごつつすり眠れるな。

○月○日

食料の買い出しの途中、ケビンと娘さんがいちやつきながら歩いているのを見かけた。

ケビンのやつは地獄に落ちねーかな。

著者：ヨハン

○月○日

街で手紙の代筆の仕事が見つかった。全てハンスの言うとおりになった。

ハンスは右腕一本を代償に、ここまでの世話をしてくれた。

悪魔は基本的に魂を取るといふ。それを考えたなら、ハンスは本当に良心的価格のいい悪魔だったのだ。悪魔に良し悪しがあるかはわからないが。

○月○日

アンナ。

元・奴隷の少女に、俺が付けた名前だ。

アンナはぐずる癖があるが、基本的には賢い子だ。

事務所に来てきてもいいことになり、ちよつとした手伝いをすればまかないも出ることになった。

本当に、この職場には感謝しかない。

○月○日

新しい住居は、部屋もアンナと分けてあるし。

流石に、もう抜いても、いい頃合いだろう。

○月○日

ふう……。

この世界は、かくも、美しい。

○月○日

ハンスには感謝してもしきれない。

干し肉が二人分買えて、アンナが怯えなくていい生活をおくれる。

その上、ちゃんと抜くこともできる。

前より豊かになっただくらいだ。

右腕の傷がひどく痛むこともあるが、これは流石にもらい過ぎじゃないだろうか？

○月○日

アンナが、教会に通いたいと言いだした。

そして、神父様に字を習いたいと言っていた。

……だが、それはここまでしてくれた悪魔ハンスに申し訳ない気がする。

一晩考えさせてほしいと言った。

○月○日

文字なら俺が教えると言ってアンナに納得させた。

すごく喜んでいた。……そうか、そんなに勉強したかったのか。

○月○日

今日は抜いてから寝よう。

○月○日

……何かが、以前と違う気がする。

○月○日

もしかして、俺のチ○コ、左に曲がついていないか？

○月○日

右腕を、使いたい。

○月○日

違和感の正体がわかった。

左曲がりと右腕がマッチングするんだ。絶対にそうだ。

○月○日

最初は、片腕になったから上手くいたせなくなっただと思っただ。

片腕になって面倒になるのは、後の処理だけだ。いたす最中は関係ない。

二回めで薄々感づいていたが……左手じゃ、だめなんだ。

○月○日

ハンスの野郎……もしかして、こうなることをわかって右腕要求してきたのか？
あいつは、真正正銘の悪魔だ。

○月○日

アンナと戯れて気を紛らわす。

そうだ、あれは仕方のないことだった。

あの時俺は、アンナのためになら右腕なんか惜しくないと思つた。

それを嘘にはできない。

○月○日

アンナに心配された。最近、ちゃんと寝れているか、と。

……小さい子に心配されるようではダメだな。

美味しいスープを作るから元気を出して、と食卓で待たされる。

食材が以前に比べて良いのもあるが、アンナは本当に料理の才能があつた。

野菜をホロホロに煮崩したスープをさじで口に運びながら、今夜はちゃんと寝ようと心に決めた。

○月○日

昨晩は、激痛で目が醒めた。

無意識のうちに、右腕を使おうとしていたらしい。

痛む右腕を抱え、タオルケットを噛んで叫びを噛み殺す。

クソツ……ハンス、どこかで今の俺を見て笑っているのか？

アンナのことは感謝している。

だが、次にあつた時にやつ横面を張らずにいられる自信がない。

○月○日

アンナが、一緒に寝ようと言いだした。

右腕が痛いなら一晩中でも擦さすってあげる、と言って、譲らない。

どうやら、痛みで目を覚ます時の唸り声を聞かれたらしい。

そして、俺が目の下に隈くまを作っている理由を右腕の痛みと勘違いしたようだ。

いくつも言い訳をしたが、結局は、妙に聡いところのあるアンナに説き伏せられてしまった。

アンナ、違うんだ。違うんだよ。

○月○日

一緒に寝るようになって三日で、股間にテントを立てているのがバレた。

顔を赤くして部屋から飛び出していくアンナを見て、無性に死にたくなつた。

○月○日

アンナが、目を合わせてくれなくなった。

○月○日

ハンス、今どこにいるんだお前。

アンナのことは感謝している。嘘じゃない。

だから、お前を殺して俺も死のう。

○月○日

……あれから、立たない。

○月○日

今日も、立つ様子はない。

アンナも目を合わせてくれない。

ハンス、お前、こうなることがわかっていたのか？

大した男だよ、お前は。間違いなく、俺の爺さんより賢いだろう。

だが、俺の怒りまで計算に入れていたか？

次に出会ったら、絶対殺す。

○月○日

限界だ。

○月○日

朝起きたら、アンナがベッドに潜り込んで、寝ていた。

俺のことを心配してくれているのだろう。こんな情けない俺のことを。不覚にも泣きそうになった。

○月○日

アンナは相変わらず目を合わせてくれないが、目を覚ますとベッドに潜り込んでい

○月○日

アンナが体重をかけて寝るものだから、股間のアレが少し反応して固くなっていた。

○月○日

気のせいかな……アンナ、わかってやっっていないか？

○月○日

今日のアンナの手料理に、肉の量が少しだけ増えている気がする。

無駄遣いしてないか、と尋ねたら、無駄遣いにはならない、とアンナは答えた。

○月○日

アンナの手は、すべすべだ。

○月○日

間違いない、死んだ後に俺の魂は地獄へ落ちるだろう。

ハンスのやつ、ここまで見越して……くそつたれ、してやられた。

最後まで我慢できなかつたことを悔いて、嘆く俺の頭を、アンナは優しく抱きかかえてくれた。

「……私がしてあげたかつたの。それじゃ、ダメ？」

耳元で、そんなことを囁くアンナ。吐息が耳にかかつて、妙にこそばゆかつた。

なんでだろう……なんで、アンナの胸に抱かれていると、こんなにドキドキするのだろうか。

「気にしなくていいから……責任を取るだけでいいから……」

俺の耳元で、そんなふうにアンナは呟いた、と思う。

わかつた。一生をかけて……責任を……取る、よ。約束、す、る……。

最後まで、ちゃんと言い切れたかは憶えていない。

俺は不思議なやすらぎに包まれて、久方ぶりにぐっすり眠つた。

昨晚のことは、それ以上はわからない。

著者：アンナ

○月○日

はい、かちー♡

著者：ハンス

○月○日

ハンスです。何とか生き残りました。逃げ切りました。

お酢とシソで赤い液体作っておいて正解でした。

頭からそれ被って血みどろを偽装して、死体のふりで敵味方を欺いて来ました。

我ながら完璧な作戦でしたね。

逃亡時、匍匐前進の途中で懐から日記帳を落としたっばいけども。

まあ、いいや。あれはもうどうせ、シソの汁をこぼしてベタベタだったし。

なんでかな……いわれなき罪を被せられている気もしますが、俺は、元気です。
不幸体質ハードラック気味の俺でもこうやって生きてる。

だから、多分、ヨハンの方も上手くやっているだろう。

ヨハンは元気だろうか。元気だといいが。

街に行けば逢えるかもしれないが……なんか水臭いな。

いつか、会いに行こう。それは、今ではないけれど。

さあ、次はどこに行こう。何をしよう。

そうだな、当面の目標は……また、ジョークの通じる相手を探すのがいい。

人生ってのは、ジョークの通じる相手がいるだけで豊かになる。

だから、ここいらで筆を置いて、さっさと友人を探しに出かけることにしよう。

異世界最初の友人、ヨハンの健康を祈りながら

ハンス・タロウ・ヤマダ